

マサチューセッツのウォールデン湖、「ソローの小屋」の揺り椅子に腰掛けてしまったからでしょうか、私はまだニューイングランドを彷徨っています。ニューイングランドと言えば、魔女狩り、魔女裁判と言えば、ピューリタンです。その点をボンヤリ考えていた私に呼びかける本がありました。『エマソンと三人の魔女』（吉田とよ子著）。とても面白くて、スッキリしました。

1692年、ニューイングランドのセイラムで最初の「魔女審問」が行われたとあります。魔女はヨーロッパの伝説、物語にはよく登場します。呪術を用いて人を害する、悪魔性を持つ女性のことを指します。ところが、セイラムでは実際に「魔女」とされて、裁判を受け、処刑された人々が19人もいたと言います。発端は一人の少女が家の召使いの奴隷から禁じられていた遊びを見せられ、興奮し、罪の意識に苦しみ、友人たちをその遊びに誘ってしまいました。友達も罪の意識に苦しみ出します。それは、召使いの奴隷を始め、村社会に受け入れられていなかった人のせいだとしたのです。彼らは「純真」と信じられている少女たちを「極度の興奮状態にさせ、集団ヒステリーの狂乱状態にした」ということで「魔女」とされたのです。けれども実際は少女たちの好奇心、嘘、秘密の生贄にされたことが判明しました。この裁判に関わったのが、ピューリタンの牧師を始めとするお歴々でした。

少女たちが「魔女審問」を生んでしまった背景、原因を著者は次のようにまとめています。

1. 地域ごとにまとまって移民し、村社会を作る。閉鎖的、排他的になる
2. 教会を寄り所とする生活。礼拝を守る敬虔なクリスチャンとして、服従、節制、勤勉を学ぶ
3. 家父長制のもとに女性は家庭人としての教育はあっても、社会的な場はない

このような社会、家庭のなかで、女性は息苦しさを感じていたわけです。勿論、男性も同じでしょう。ニューイングランドの人々はカルヴィンのピューリタニズムを踏襲していましたが、「人間を罪人として捉え、恩寵にすぎない敬虔な信仰」による抑圧から、「祝福された人間として創造された」と、人間性を求める信仰、意識へと変わって行きます。聖餐式の権威や儀礼化への疑問も持ち出されます。この流れの中で詩人のエマソンは指導者的地位にたって、多くの人々に感化を与えました。ニューイングランドの、家に閉じ込められていた女性たちは、19世紀にはエマソンの友人、知人となりました。これらの女性たちは、世間の非難に耐えながら、自分の道を切り開いていきました。著者は彼女たちを「魔女」として紹介してくれています。



公立幼児教育を求めた
エリザベス・ピーボディ
(1804- 1894)



文芸批評家・新聞記者
マーガレット・フーラー
(1810 - 1850)



小説家
ルイザ・メイ・オルコット
(1832 - 1888)